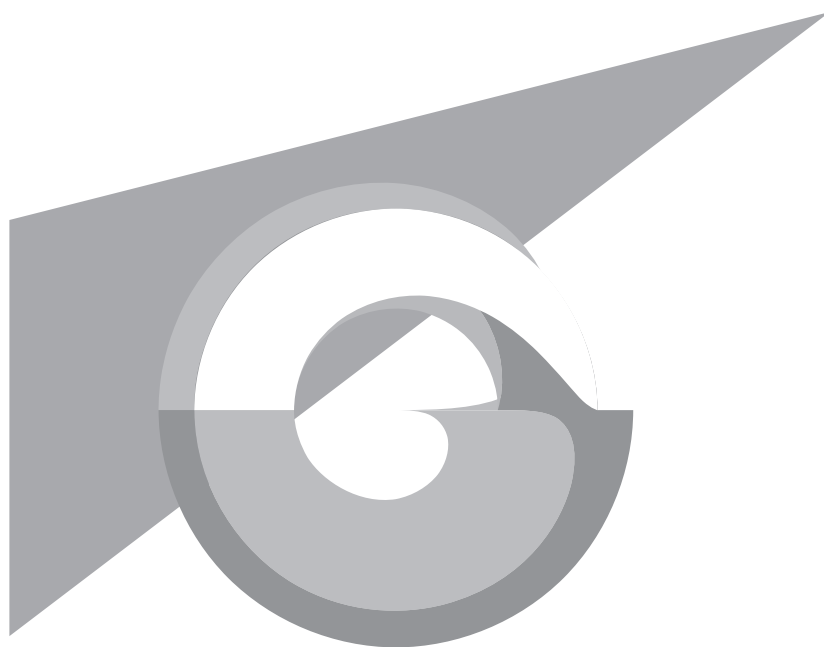


第 4 章

学年別に見る 生活の特徴

木村 治生 (1～3節)



第1節

小学生

1. 小学4年生

小4生は、比較的、規則正しい生活を送っている。早寝早起きの習慣が身につく、短時間ではあるがきちんと家庭学習をしている子が多い。親子関係をみると、肯定的なかかわりが中心である。しかし、その一方で友だち関係の緊張感が高く、「話が合わないと不安」といった思いを強く抱いている。

◆生活時間やメディア接触について

小4生は、その後の小5生以上の子どもたちと比べると、規則正しい生活を送っている。たとえば、就寝時刻をみると「10時より前」「10時ごろ」という回答が全体の7割を占め、平均時刻は22時05分である。起床の平均時刻は6時38分であり、早寝早起きの習慣が身についている。平均の睡眠時間は8時間33分であり、睡眠も十分とれているようである。

遊び場は、「公園や広場など」（「よく遊ぶ」＋「ときどき遊ぶ」、57.5%）が他の学年よりも多く、外遊びもある程度はしている。しかし、それよりも多いのは「友だちの家」（同66.7%）、「自分の家」（同65.5%）である。室内遊びが多いためか、テレビゲームを「ほとんどしない」と回答した比率が22.0%（男子9.8%、女子34.5%）と全学年で最も低い。家でのパソコンの利用（「週に5日以上」6.9%）、携帯電話の所有率（17.0%）は、相対的には低い。

◆人間関係や自分自身について

親との関係についてみると、「勉強を教えてくれる」（77.4%）、「いいことをしたときにほめてくれる」（82.4%）、「困ったときに相談にのってくれる」（73.0%）などが多く、小5生以上の学年よりも肯定的なかかわりが中心である。両親との会話は、「学校のできごとについて」（「よく話をする」＋「ときどき話をする」、父親51.1%、母親78.9%）、「友だちのことについて」（同46.8%、71.0%）が多い。

友だちとの関係では、「悩みごとを相談できる友だち」が「いない」（17.3%）、「1人」（17.3%）と回答する比率が高い。また、「仲間はずれにされないように話をあわせる」（「とてもそう」＋「まあそう」、50.9%）、「友だちと話が合わないと不安に感じる」（同49.8%）などを肯定する比率が高く、友だち関係の緊張感が高い様子がうかがえる。

◆学習について

平日の家庭での学習時間は、「30分くらい」が最も多く26.2%である。小4生は「1時間未満」（「ほとんどしない」～「45分くらい」）が多く、全体の65.2%を占める。「ほとんどしない」は少ないが、学習時間は短時間の子が多い。休日の学習時間も同様である。

学校外では、「英会話などの語学教室に行っている」（13.4%）、「計算や書きとりなどのプリント教材教室に行っている」（14.9%）が、全学年を通じて最も高い。「学習塾や予備校に行っている」は19.7%と低めである。

意識面では、肯定的な回答が多く、否定的な回答は少ない。「他にやりたいことがあってもがまんして勉強する」（「とてもそう」＋「まあそう」、46.7%）、「テストで間違えた問題をやり直す」（同64.9%）は全学年を通じて高く、「勉強しようという気持ちがわからない」（同32.0%）、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」（同27.3%）などは、低い。

2. 小学5年生

家庭学習時間はわずかに長くなるが、学習に対する肯定的な意識が弱まり、否定的な意識が強まる。この傾向は、中学生まで継続する。生活面では、テレビ視聴やテレビゲームの時間の増加や、「マンガや雑誌を読む」が増えるなど、娯楽文化に接する機会が拡大する様子がみられる。思春期にさしかかる学年であるが、親子関係は悪くない。

◆生活時間やメディア接触について

就寝時刻は小4生のときよりも平均で15分ほど遅くなり、22時20分である。起床時刻はほとんど変化がないので、その分だけ睡眠時間が短くなっている。

費やす時間が増えるのは、テレビ視聴やテレビゲームの時間である。テレビを「3時間くらい」＋「3時間以上」見る比率は、小4生23.6%→小5生33.2%と9.6ポイント増加する。テレビゲームも同様に長時間する子どもが増え、この傾向は中学生になるまで続く。さらに、「マンガや雑誌を読む」という回答も小4生70.0%→小5生79.9%（「よくある」＋「ときどきある」）と増加することから、この時期に娯楽文化に触れる機会が拡大することがわかる。家でのパソコンの利用率や携帯電話の所有率は小4生から大きな変化はないが、パソコンの利用法では、「インターネットで趣味や遊びのことを調べる」が10ポイント増え、4割に達する。

◆人間関係や自分自身について

親とのかかわりは、「困ったときに相談にのってくれる」（小4生73.0%→小5生66.4%）、「あなたのことを大人として扱ってくれる」（同17.7%→14.5%）など肯定的なかかわりが減少するが、同時に「何でもすぐ口出しをする」（同26.2%→23.7%）、「考えをおしつける」（同14.9%→10.5%）など否定的なかかわりも減少する。両親との会話も、小4生から大きく変化しておらず、思春期にさしかかるといえ、関係の悪化はみられない。

友だち関係は、「悩みごとを相談できる友だち」が小4生よりも多くなる。「いない」「1人」の合計は、小4生34.6%→小5生27.3%、「2～3人」「4～6人」の合計は、48.8%→57.2%になる。「友だちといつも一緒にいたい」が83.1%（「とてもそう」＋「まあそう」）で、全学年を通じて最も高い比率になるなど、友だち関係の親密性も形成されるようである。

◆学習について

平日の家庭学習時間は、「1時間台」（「1時間くらい」＋「1時間30分くらい」）が増加し、小4生25.7%→小5生31.9%となって、学習時間が長くなる傾向がみられる。学校外学習では、「学習塾や予備校に行っている」子が、小4生19.7%→小5生25.8%と増加する。

意識面では、小4生と比べると肯定的な回答が減り、否定的な回答が増加している。「他にやりたいことがあってもがまんして勉強する」（「とてもそう」＋「まあそう」、小4生46.7%→小5生40.6%）、「テストで間違えた問題をやり直す」（同64.9%→57.4%）は減少し、「勉強しようという気持ちがわからない」（同32.0%→37.4%）、「上手な勉強の仕方がわからない」（同33.0%→38.5%）などは増えている。学習動機では、「成績が良いと親がほめてくれるから」が63.2%→53.6%（「とてもそう」＋「まあそう」）と減少し、親の働きかけだけでは、学習しなくなってくる。

3. 小学6年生

親子関係で肯定的なかかわりや会話が減少したり、友だち関係や先生との関係の満足度が低下したりするなど、人間関係の難しさが表れる学年である。家庭学習時間は大きな変化がないが、意識面では学習に対する否定的なとらえ方が増大する。睡眠時間の減少、テレビ視聴時間の増加は、小4生から継続して進行する。

◆生活時間やメディア接触について

就寝時刻は小5生から、さらに平均で18分遅くなり、平均の睡眠時間は8時間03分となる。午前0時を過ぎても起きている子は全体の11.3%であり、中学生以上と比べれば少数派だが、中学受験をする子に限ると、30.6%が午前0時を過ぎても起きている。

テレビ視聴時間の増加は小4生から継続していて、「3時間くらい」＋「3時間以上」見る比率は、小5生33.2%→小6生45.0%と、半数近くになる。

遊び場については、室内が中心であることは小5生までもと変わらない。しかし、「コンビニやスーパーなどの近所のお店」（「よく遊ぶ」＋「ときどき遊ぶ」、19.7%）、「ゲームセンターやカラオケ」（同11.7%）、「デパートなどがある繁華街（大きな街）」（同10.3%）などが増え、消費文化にも徐々に近づいていく様子がわかる。携帯電話の所有率は22.0%だが、女子は26.6%と4人に1人が所有している。

◆人間関係や自分自身について

小6生になると、親からの肯定的なかかわりが減少する。「いいことをしたときにほめてくれる」（小5生80.8%→小6生67.9%）、「悪いことをしたときにしかってくれる」（同86.3%→80.4%）、「困ったときに相談にのってくれる」（同66.4%→52.1%）などの項目で、減少幅が大きい。両親との会話も小5生から減少し、「学校のでできごとについて」「友だちのことについて」は父母ともに10ポイント

程度「話をする」（「よく話をする」＋「ときどき話をする」）比率が低下する。それ以外の話題でも比率は低下しており、両親との距離が遠くなる。

満足度をみても、「家族との関係」（「とても満足している」＋「まあ満足している」、小5生81.2%→小6生77.6%）、「友だちとの関係」（同83.8%→80.4%）、「学校の先生との関係」（同72.4%→65.4%）などが低下しており、親子関係だけでなく人間関係全般にかかわりの難しさが表れている。

◆学習について

平日の家庭学習時間は、「2時間以上」（「2時間くらい」～「3時間以上」）でわずかに増加し、小5生9.8%→小6生12.5%となっている。中学受験をする子が長時間勉強するためであるが、小学生のうちはそれほど大きく変化しておらず、短時間学習する子が中心である。家庭学習以外に「学習塾や予備校に行っている」子は、小5生25.8%→小6生30.4%で、このうち35.9%が受験を目的とした塾に通っている。

意識面では、継続して肯定的な回答が減り、否定的な回答が増加している。「わからないことがあると『もっと知りたい』と思う」（「とてもそう」＋「まあそう」、小5生63.0%→小6生58.7%）など知的好奇心が低下し、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」（同30.9%→37.9%）といった学習目的が見えない悩みが増えてくる。